

縄文の森から 第14号 目次

後期旧石器時代前半期における種子島地域出土石器の残存デンプン分析
寒川 朋枝・・・3

深浦式土器に見る文様割付の時期的変化について ―細山田段遺跡を中心に―
相良 典隆, 森えりこ・・・11

鹿児島県における弥生時代～古墳時代初頭の墓の基礎的な研究
-覆石墓・葺石墳・配石墓, 壺棺墓・甕棺墓, 石棺墓, 木棺墓, 支石墓の集成と考察-
湯場崎 辰巳・・・20

近世鹿児島城下町についての考察
阿比留 士朗・・・30

令和2年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

深浦式土器に見る文様割付の時期的変化について — 細山田段遺跡を中心に —

相良典隆, 森えりこ

Temporal change to Design Layout System of Hukaura pottery with a focus on Hosoyamadadan Site
Noritaka Sagara, Eriko Mori

要旨

本稿では、細山田段遺跡から出土した深浦式土器を中心に、縄文時代前期末から中期にかけての土器型式を対象とし、それぞれの文様割付の分析を行った。分析の結果、深浦式土器は4単位という区画の基準をもち、同時期に存在した他系統の土器型式では多区画や変則区画型の文様割付が見られ、後続する春日式土器では区画数の多様化が見られた。

キーワード 深浦式土器, 文様割付

1 はじめに

細山田段遺跡では、平成25～27年度の発掘調査において、縄文時代前期末から中期と考えられる土坑178基とともに多くの深浦式土器が出土した。

深浦式土器は、南九州の縄文時代前期末から中期前葉に位置づけられる土器様式で、主に貝殻連点文や突帯文により幾何学的モチーフを描く。曾畑式土器様式の系統を引くもので、併行関係にある鷹島式土器や船元式土器の影響を受けるが、地域性の強い土器様式である(相美2008)。

深浦式土器の文様は、貝殻連点文や突帯文・沈線文・相交弧文などを用いて、直線的あるいは曲線的なモチーフを描くことに大きな特徴がある。本稿では、深浦式土器の日本山段階から石峰段階、そして最終段階である鞍谷段階に至る型式の変遷にともなって、区画数や文様割付の意識がどのように変化していったかを調べ、その時期にどのような施文の計画性があったのかを検討したい。また、同時期と考えられる他系統の土器や後続型式である春日式土器についても、可能な限り割付タイプの分類を行い、比較・検討をしたいと考える。

2 細山田段遺跡について

細山田段遺跡は鹿屋市串良町細山田および曾於郡大崎町持留に所在する。遺跡は肝属川の支流である串良川と持留川に挟まれたシラス台地の西端に位置する。標高は約90～100mである。

細山田段遺跡は縄文時代早期から古墳時代の複合遺跡であり、前述のとおり特に縄文時代前期末から中期にかけての遺構・遺物が充実しており、深浦式土器のほかに野久尾式土器や大歳山式土器・鷹島式土器・船元式土器などが出土している。

3 深浦式土器について

深浦式土器の特徴として、まず貝殻連点文・突帯文・沈線文を主文様とした幾何学的な文様を描くことが挙げられる。底部の形態は丸底あるいはやや尖り気味の丸底を呈している。相美伊久雄氏によって「日本山段階」「石峰段階」「鞍谷段階」の三段階に細分されており(相美2000・2006ほか)、段階が新しくなるにつれて「貝殻連点文を主文様とするものから突帯文を主文様とするものへ」「直線的モチーフから曲線的モチーフへ」「口縁部が外反・直行しているものから口縁部が内弯しているものへ」といった変容が見られる。ただし、施文がなされず地文の貝殻条痕のみ、または無文の土器が各段階に存在している(相美2008ほか)。

日本山段階は、貝殻連点文、相交弧文、貝殻連点文+突帯文が主文様要素で、直線的なモチーフを描いている。貝殻連点文+突帯文の場合は、口縁部に数条の突帯文を巡らせるもので「片野タイプ」と呼ばれる(柴畑1986・1993)。口縁部は外傾・外反し、口縁部に山形の突起が付くものもある。

石峰段階は、突帯文が主文様要素で直線的なモチーフを描く。縦位に貼り付けられた2条突帯が特徴的である。口縁部は外傾・外反・直行し、口縁部に山形の突起が付くものもある。

鞍谷段階は、突帯文が主文様要素で曲線的なモチーフを描いている。外面に縦位の貝殻条痕を施すものもある。口縁部は直行・内弯し、波状口縁が増加傾向にある。

時間的な位置づけとしては、出土遺跡における伴出・共出状況(相美2000)や器形・文様に見られる大歳山～船元Ⅱ式との共通性・類似性(相美2011ほか)から、日本山段階が前期末～中期初頭(大歳山式～鷹島式併行

期)、石峰段階が中期初頭(鷹島式~船元Ⅰ式併行期)、鞍谷段階が中期前葉(船元Ⅱ式併行期)と考えられる。

なお、細山田段遺跡では、片野タイプとみられる資料の出土量が多く、典型的な石峰段階が少ないという特徴がある。

4 対象資料と方法

本研究の対象資料となる深浦式土器だが、細山田段遺跡で出土した資料を中心に分類を行う。ただし、より多くの資料から傾向を探るために、桐木耳取遺跡や上水流遺跡等の出土土器も対象資料を選別して分類を行う。また、深浦式土器との関係性が考えられる野久尾式土器、併行期にある大歳山~船元Ⅱ式土器、後続すると想定される春日式土器の区画数や文様割付を観察し、どの時期にどのような変容があったのかを検討する。

測定・分類の方法は、小林謙一氏の文様割付の研究(小林2000)を参照した。波状口縁の波頂部などのアクセントとなる文様単位の中心点や、口縁部外面の文様の区切り等を割付の起点・終点とし、分割された区画の境界線を1, 2, 3...と表す。測定の結果を第1図のように上から見た模式図として記録する。なお、胴部に口縁部とは異なる区画の意識が明瞭に見られた場合や、胴部の文様が口縁部の割付にあっているものは、二重の円で外側に口縁部、内側に胴部の境界線を記録するものとする。得られた結果を集計・分類し、そこから文様割付の時期的変化について検討する。

割付タイプの種類については、小林氏の名称を用いる。第2図のようにA~Cの3種類に分類する。割付タイプAは「均等割付型」で、4, 5, 6, ...10単位など、ほぼ等間隔で正確に割り付けられたものである。割付タイプBは「変則区画型」と考えられるもので、意識的に等間隔でない変則的な区画割付を行うものである。割付タイプCは、区画の計画性が感じられず製作上の成り行きで施文していくもので、「成り行き型」とする。分析資料の一覧を第1~3表に、分析した主な土器を第3・4図に示す。

5 考察

第4表は、細山田段遺跡およびその他の遺跡から出土した深浦式土器の割付タイプ・区画数の分類結果をまとめたものである。

細山田段遺跡では、日木山・石峰・鞍谷の三段階をとおして、4単位を基準に製作されたものが9割以上を占めていた。口縁部と胴部の区画数が異なるものについても、まず口縁部を4単位に分割し、その区画をさらに均等に分割することで胴部に8単位の割付を施したことがうかがえる。鞍谷段階でBの変則区画型が1点見られたが、Cの成り行き型は見られなかった。

上水流遺跡では、細山田段遺跡に次ぐ24点の資料を確認したが、その8割以上が4単位のものであった。それ以外の資料も、口縁部の4単位をもとに、胴部を4ないし8分割したものであった。

桐木耳取遺跡では、日木山段階と鞍谷段階で4単位のもののみが確認された。石峰段階については、区画数を確認できる資料がなかった。

細山田段遺跡・上水流遺跡・桐木耳取遺跡以外の遺跡から出土した資料も、4単位やそれを基準に胴部のみ8単位に分割したものがほとんどだったが、2点のみそれぞれ変則区画型と成り行き型に分類した。変則区画型に分類した57は、均等割付型の4~8単位に似ているものの、胴部の最後の区画のみ縦位の連点文が2本入って3分割されている。ただし、均等な分割ではなく雑な印象を受けることから、意図的な変則区画ではなく製作上の間違いである可能性もある。成り行き型に分類した58は、最後の部分を除いてほぼ等間隔で文様が配置されており、文様製作の計画段階で区画の分割は行わなくても、何らかのスケールを用いて施文していたことが想定される。

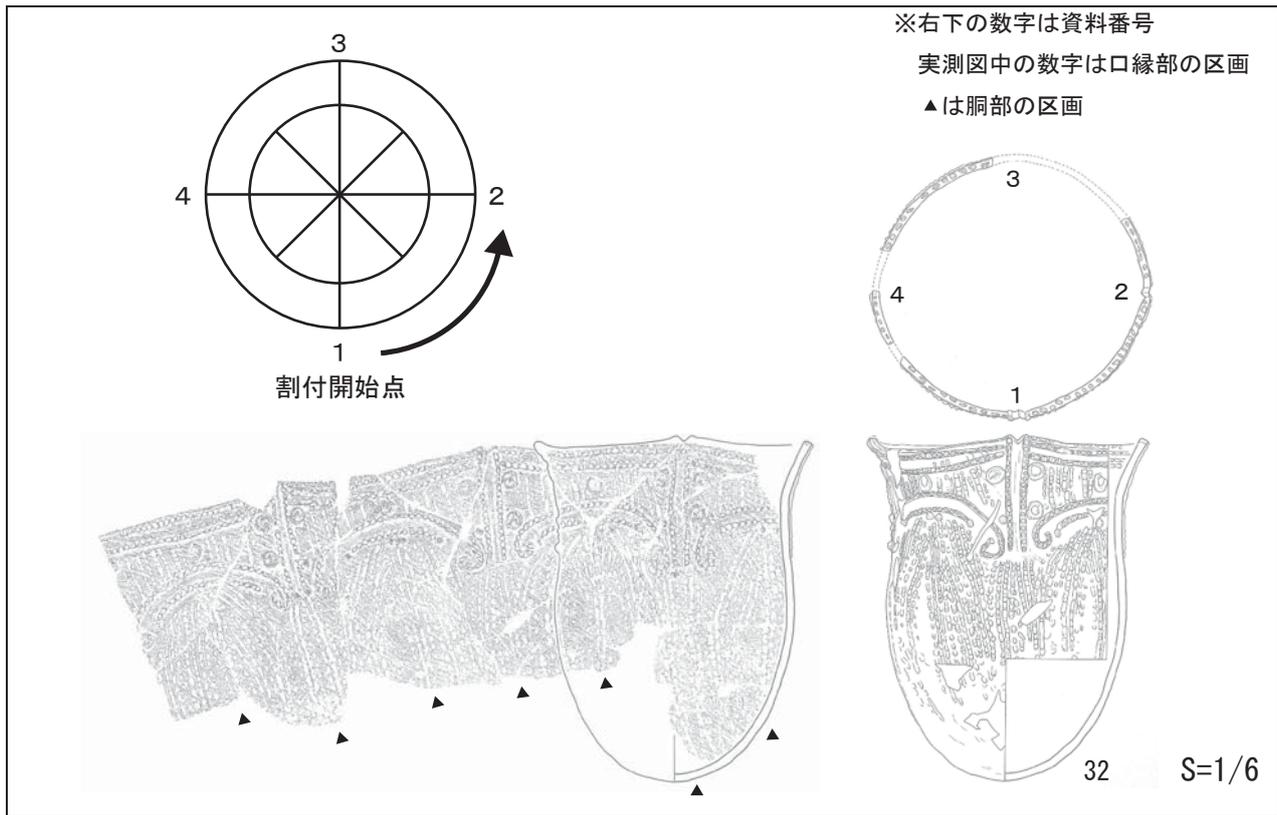
縄文時代前期末から中期前葉まで作り続けられた深浦式土器だが、第4表の分類結果から、日木山段階から鞍谷段階まで一貫して4単位を基準に文様割付が行われていたことが見て取れる。資料数が少ないため想定域を抜けないが、各段階において器形や主文様要素の変容がありながらも、基本は波状口縁や口縁部に山形突起を配置して4単位に分割し、その区画を胴部に延長して4または4の倍数で文様を割り付けていくという製作方法が存在していたと考えられる。

第5表は、深浦式土器および同時期と想定される土器型式と、後続する春日式土器の割付タイプ・区画数の分類結果をまとめたものである。

36は日木山段階と併行期にある大歳山式土器であり、口縁部に緩やかな8つの波頂部が見られる。ただし、胴部には縄文を施しており、割付の区画という意識は感じられない。

92は条痕文土器であり、波頂部が尖り気味の4単位の波状口縁である。胴部が欠損しており、文様の単位は確認できない。

野久尾式土器は野久尾遺跡から出土した1点を除いては、桐木耳取遺跡から出土したものである。均等割付型から成り行き型までバラエティに富んでいる。84~87は均等割付型で、ミミズばれ状の突帯によって、それぞれ4・6・10単位に分割されている。88はV字状のアクセントで3単位に分割されるが、等間隔ではないために変則区画型に分類する。89は口縁部に3か所の大きな突起があり、そこを基準にミミズばれ状の突帯数条で構成されるV字状の文様が、胴部のくびれ部分に向けて



第1図 土器の文様割付模式図

	3 単位以下	4 単位	5 単位	6 単位	8 単位	多区画
A 均等割付	ほぼ正確な割付のもの					
B 変則区画	口縁部と胴部の区画が異なるもの・胴部の文様が口縁の割付にあっているもの					
C 成り行き	等間隔・均等でない割付のもの					
	3 単位	線区画など	非対称	3 - 6 単位	4 - 9 単位	11 単位

第2図 割付タイプの分類例（小林 2000 をもとに一部改変）

第1表 細山田段遺跡分析資料一覧

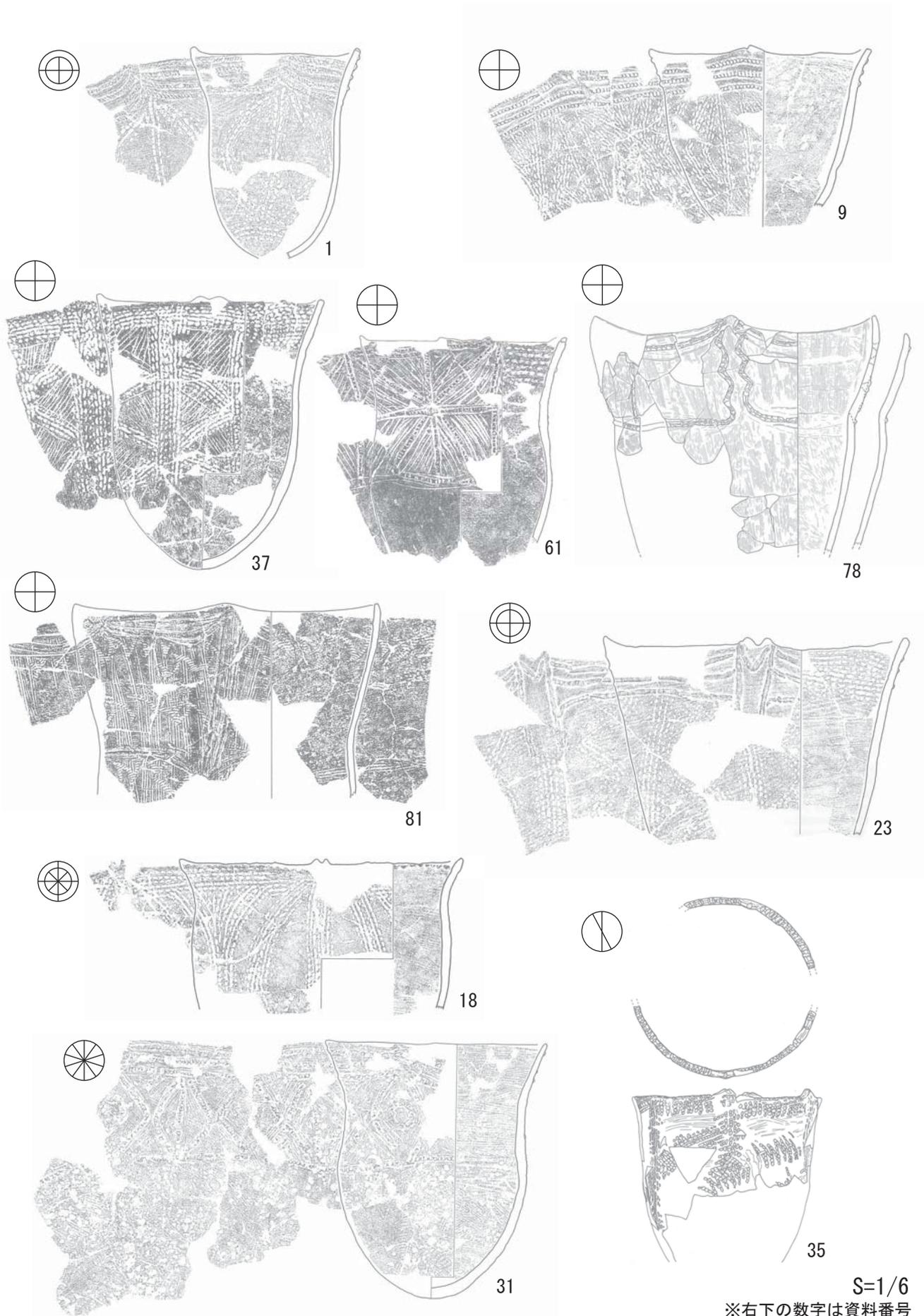
	型式	分類	割付タイプ	区画数	掲載番号	口径 (cm)	文様
1	深浦式	日木山	A	2-4	56	18.8	片野タイプ, 波頂部+縦刺突
2	深浦式	日木山	A	4	563	23.8	波頂部
3	深浦式	日木山	A	4	566	34.9	片野タイプ, 波頂部
4	深浦式	日木山	A	4	567	30	波頂部
5	深浦式	日木山	A	4	605	31.8	片野タイプ, 波頂部
6	深浦式	日木山	A	4	616	35.8	片野タイプ, 波頂部
7	深浦式	日木山	A	4	621	25.3	波頂部
8	深浦式	日木山	A	4	639	39.9	片野タイプ, 波頂部
9	深浦式	日木山	A	4	641	24.7	片野タイプ, 波頂部
10	深浦式	日木山	A	4	656	30	片野タイプ, 波頂部
11	深浦式	日木山	A	4	685	34.8	片野タイプ, 波頂部
12	深浦式	日木山	A	4	950	19.4	波頂部
13	深浦式	日木山	A	4	976	42	波頂部
14	深浦式	日木山	A	4	977	39.8	波頂部
15	深浦式	日木山	A	4-4	963・964	28.3	波頂部, 縦刺突
16	深浦式	日木山	A	4-4	965	34	波頂部, 縦刺突
17	深浦式	日木山	A	4-8	619・620	32.8	波頂部, 縦刺突
18	深浦式	日木山	A	4-8	949	31.7	波頂部, 縦刺突
19	深浦式	石峰	A	4	576	40	縦突帯
20	深浦式	石峰	A	4	750	40.3	縦突帯
21	深浦式	石峰	A	4	791	43.6	波頂部
22	深浦式	石峰	A	4	793	26	波頂部
23	深浦式	石峰	A	4-4	562	33.7	波頂部, 縦突帯
24	深浦式	石峰	A	4-4	575	46.3	波頂部, 縦突帯
25	深浦式	石峰	A	4-4	737	36.2	波頂部, 縦突帯
26	深浦式	石峰	A	4-4	773・774	21.7	波頂部, 縦突帯
27	深浦式	石峰	A	4-4	779	31.6	波頂部, 縦突帯
28	深浦式	石峰	A	4-4	795	19.7	波頂部, 縦突帯
29	深浦式	石峰	A	4-4	810	45.1	波頂部, 縦突帯
30	深浦式	石峰	A	4-8	787	36.8	波頂部, 縦突帯+縦・斜突帯
31	深浦式	石峰	A	10以上	602	24.6	菱形の刻目突帯
32	深浦式	鞍谷	A	4-8	601	22.4	波頂部, 縦突帯+刺突
33	深浦式	鞍谷	A	4-4	819	30	波頂部, 縦突帯
34	深浦式	鞍谷	A	4-4	893	43.4	波頂部, 縦突帯
35	深浦式	鞍谷	B	4	1014	21.2	波頂部
36	大歳山式	-	A	8	1111~1113	28.1	波頂部

第2表 その他の遺跡分析資料一覧1

	遺跡名	型式	分類	割付タイプ	区画数	掲載番号	口径 (cm)
37	上水流	深浦式	日木山	A	4	14	25
38	上水流	深浦式	日木山	A	4	16	30
39	上水流	深浦式	日木山	A	4	18	17.6
40	上水流	深浦式	日木山	A	4	20	25
41	上水流	深浦式	日木山	A	4	23	19
42	上水流	深浦式	日木山	A	4	37	22.8
43	上水流	深浦式	日木山	A	4	207	24
44	上水流	深浦式	日木山	A	4	214	14.6
45	上水流	深浦式	日木山	A	4	215	18
46	上水流	深浦式	日木山	A	4	219	29.5
47	上水流	深浦式	日木山	A	4-8	35	24.6
48	桐木耳取	深浦式	日木山	A	4	49	33
49	天神段	深浦式	日木山	A	4	192	36
50	天神段	深浦式	日木山	A	4	195	22.6
51	天神段	深浦式	日木山	A	4	196	20.3
52	花ノ木	深浦式	日木山	A	4	1	35.4
53	星塚	深浦式	日木山	A	4	89	33
54	星塚	深浦式	日木山	A	4	93	26
55	堂園平	深浦式	日木山	A	4	249	20.2
56	星塚	深浦式	日木山	A	4-8	91	29
57	市ノ原第3地点	深浦式	日木山	B	4-9	646	30
58	星塚	深浦式	日木山	C	11	92	32
59	上水流	深浦式	石峰	A	4	241	22
60	上水流	深浦式	石峰	A	4	243	25

第3表 その他の遺跡分析資料一覧2

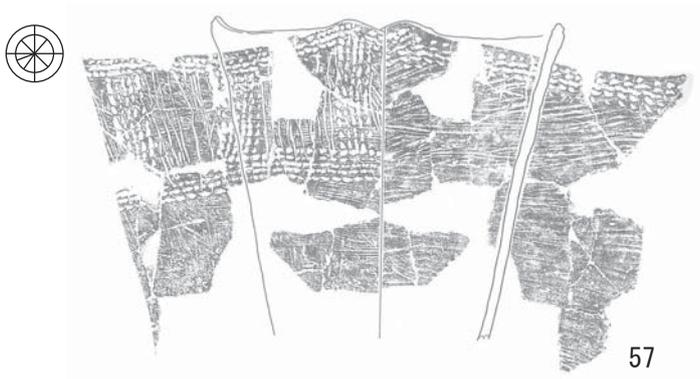
	遺跡名	型式	分類	割付タイプ	区画数	掲載番号	口径 (cm)
61	上水流	深浦式	石峰	A	4	244	23
62	上水流	深浦式	石峰	A	4	251	40
63	上水流	深浦式	石峰	A	4	257	26.6
64	上水流	深浦式	石峰	A	4	391	22
65	上水流	深浦式	石峰	A	4	392	42
66	上水流	深浦式	石峰	A	4	462	24
67	上水流	深浦式	石峰	A	4	463	12
68	上水流	深浦式	石峰	A	4-4	256	25
69	上水流	深浦式	石峰	A	4-8	247	31.8
70	上水流	深浦式	石峰	A	4-8	543	31
71	市ノ原第5地点	深浦式	石峰	A	4	254	22.4
72	仁田尾中A・B	深浦式	石峰	A	4	270	29
73	上水流	深浦式	鞍谷	A	4	584	25.6
74	桐木耳取	深浦式	鞍谷	A	4	39	27.2
75	桐木耳取	深浦式	鞍谷	A	4	40	21.4
76	桐木耳取	深浦式	鞍谷	A	4	126	14
77	桐木耳取	深浦式	鞍谷	A	4	127	13.2
78	桐木耳取	深浦式	鞍谷	A	4	137	31
79	桐木耳取	深浦式	鞍谷	A	4	140	32
80	山ノ脇	深浦式	鞍谷	A	4	103	27
81	市ノ原第3地点	深浦式	鞍谷	A	4	654	33.8
82	一湊松山	深浦式	鞍谷	A	4	510	40.4
83	一湊松山	深浦式	鞍谷	A	4	511	37
84	桐木耳取	野久尾式	—	A	4	267	41.8
85	桐木耳取	野久尾式	—	A	6	273	23.6
86	桐木耳取	野久尾式	—	A	6	280	34
87	桐木耳取	野久尾式	—	A	10以上	246	25
88	桐木耳取	野久尾式	—	B	3	260	35
89	桐木耳取	野久尾式	—	B	3-6	259	40
90	桐木耳取	野久尾式	—	C	11	287	31
91	野久尾	野久尾式	—	A	4		
92	天神段	条痕文	—	A	4	290	36.2
93	桐木耳取	船元I式	—	A	6	62	25
94	上水流	船元II式	—	A	4	778	32
95	上水流	船元II式	—	A	4-8	775	21.2
96	上水流	船元II式	—	A	5	782	12
97	市ノ原第3地点	船元II式	—	A	12	711	60
98	上水流	春日式	前谷	A	4	46	32
99	上水流	春日式	前谷	A	4	101	37
100	上水流	春日式	前谷	A	4	108	21.4
101	上水流	春日式	前谷	A	4	170	25
102	上水流	春日式	前谷	A	4	172	24
103	上水流	春日式	前谷	A	4	174	31
104	上水流	春日式	前谷	A	4	177	39
105	上水流	春日式	前谷	A	4	196	23.6
106	上水流	春日式	前谷	A	4	203	21.4
107	上水流	春日式	前谷	A	5	1	33.4
108	上水流	春日式	前谷	A	5	3	27
109	上水流	春日式	前谷	A	5	52	29
110	上水流	春日式	前谷	A	6	2	29
111	上水流	春日式	前谷	A	6	47	24
112	上水流	春日式	前谷	A	6	94	31
113	上水流	春日式	前谷	A	8	16	30
114	上水流	春日式	前谷	A	8	109	29.4
115	上水流	春日式	前谷	A	10以上	41	16.6
116	上水流	春日式	前谷	B	3	95	20.4
117	上水流	春日式	前谷	B	3	99	16
118	上水流	春日式	前谷	B	5	35	34
119	上水流	春日式	前谷	B	5	98	17
120	上水流	春日式	轟木ヶ迫	A	5	287	32
121	上水流	春日式	轟木ヶ迫	A	8	242	36.6
122	鷺ヶ迫	春日式	前谷	A	4-4	142	23.2
123	鷺ヶ迫	春日式	北手牧	A	4-8	139	27
124	鷺ヶ迫	春日式	北手牧	A	4-8	145	18.4
125	中津野	春日式	—	A	5	74	26.4



S=1/6

※右下の数字は資料番号

第3図 主な対象資料1



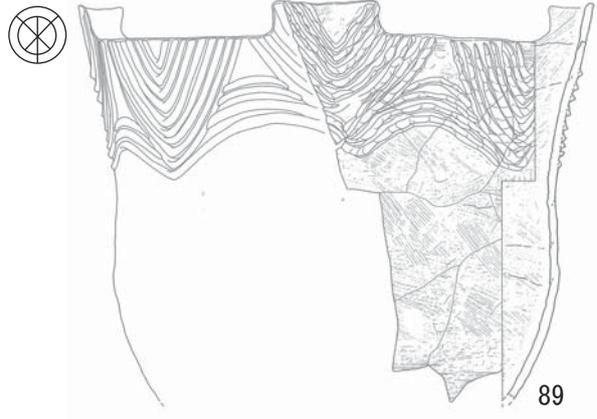
57



58



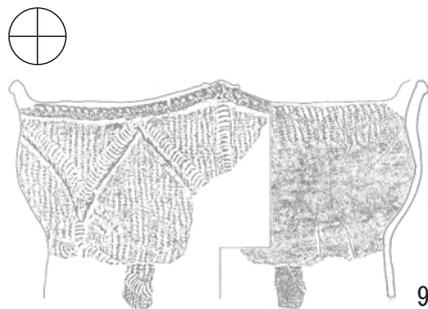
88



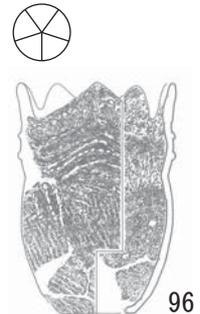
89



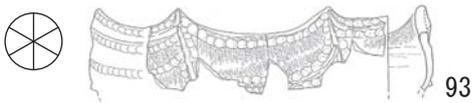
36



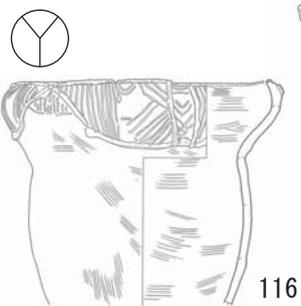
94



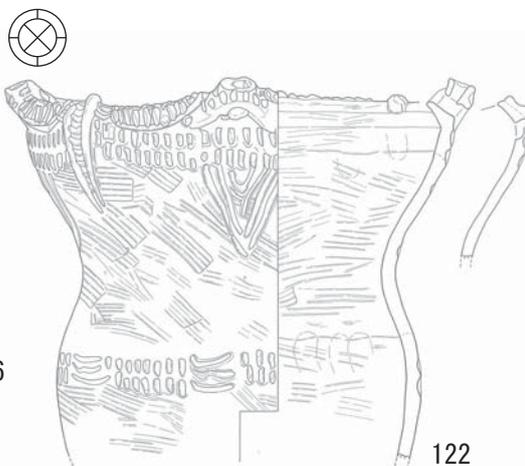
96



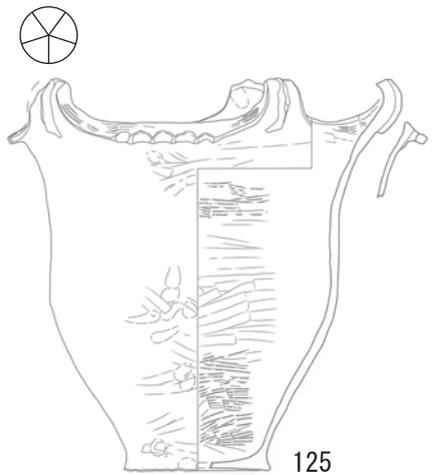
93



116



122



125

S=1/6

※右下の数字は資料番号

第4図 主な対象資料2

第4表 深浦式土器の割付タイプ・区画数の分類結果

		A 均等割付					B 変則区画		C 成り行き	合計
		2-4	4	4-4	4-8	10以上	4	4-9	11	
細山田段	日木山	1	13	2	2					18
	石峰		4	7	1	1				13
	鞍谷			2	1		1			4
その他	日木山		18		2			1	1	22
	石峰		11	1	2					14
	鞍谷		11							11
合計		1	57	12	8	1	1	1	1	82

第5表 深浦式土器及び同時期の型式と春日式土器の割付タイプ・区画数の分類結果

		A 均等割付								B 変則区画					C 成り行き
		2-4	4	4-4	4-8	5	6	8	10以上	3	4	3-6	4-9	5?	11
深浦式(日木山)		1	31	2	4							1			1
深浦式(石峰)			15	8	3			1							
深浦式(鞍谷)			11	2	1					1					
大歳山式							1								
条痕文			1												
野久尾式			2				2	1	1		1				1
船元I式							1								
船元II式			1		1	1		1							
春日式			9	1	2	5	3	3	1	2				2	
合計		1	70	13	11	6	6	4	4	3	1	1	1	2	2

6か所配置される。欠損が多く突起やV字状の文様の配置が想定であるため、88と同じく変則区画型に分類する。90も欠損が多いが、口縁部の突帯によりやや不揃いではあるものの11単位に分割されると想定できるため、成り行き型に分類する。

93の船元I式土器は、6単位に分割される波状口縁をもつ資料と想定される。船元II式土器の94・95は、胴部の文様区画が正確には確認できないが、それぞれ4単位と4-8単位に分類する。96と97は、欠損が多いものの、それぞれ5単位と12単位に分類する。

上水流遺跡から出土した春日式土器は、均等区画型の4単位より5・6・8・10単位が多く。また、変則区画型の5単位として分類した118・119は、区画の幅が不均等で、意図的な変則区画というより製作上の間違いを修正しようとした結果のような印象を受ける。当初の計画性を無視しているという意味では、成り行き型に近い。鷲ヶ迫遺跡から出土した122～124は4-4単位・4-8単位に分類する。春日式土器の区画数の割合は、4単位以外が5割を超えており、区画数の多様化が見て取れる。近年の発掘調査でも、中津野遺跡から5単位を数える春日式土器(125)が出土している。

今回、区画数が確認できた資料は125点である。そのうち、深浦式土器は82点あり、口縁部が4単位となるものが78点となり、9割以上を占めていた。しかし、同時期に存在した他系統の土器については、4単位以外

が6割を超えており、深浦式土器の状況とは異なる。また、後続する春日式土器についても、4単位以外が5割を超えている。ではなぜ春日式土器には、このような区画数の多様化が見られるのだろうか。

細山田段遺跡の出土土器の年代測定において、深浦式土器や野久尾式土器の存在していた時期が、関東地方の縄文時代中期土器である五領ヶ台～加曾利E I式と重なることを裏付ける結果が出ている。小林謙一氏によれば、五領ヶ台式期は口縁部・胴部ともに4区画が中心である。勝坂1式期から勝坂3式期になると、口縁部は4区画であるものの、胴部は区画多様化の傾向がある。そして、加曾利E式の前半期は4または6区画が中心、後半期は胴部の多区画化という時期別の変化が見られる(小林2000)。南九州においては、4単位という基準を持ち続けた深浦式土器と、多区画や変則区画が見られる野久尾式土器、船元I・II式土器やその他の土器型式が交流を図りながら、春日式土器に見られる文様割付・区画数の多様化に影響を与えたのではないかと推測する。

6 まとめ

本研究を通して、以下のような点を確認できた。
 (1) 深浦式土器は、日木山・石峰・鞍谷のどの段階においても、4単位という区画の基準をもつ。波状口縁や口縁部の山形突起で分割された区画が胴部文様の区画と連動し、4単位を主体とした文様構成になっている。

(2) 野久尾式土器や大歳山式土器、船元Ⅰ・Ⅱ式土器に見られる多区画や変則区画の文様割付が、深浦式土器の4単位を基準とする製作方法と交流を図りながら、後続の春日式土器に見られる文様割付・区画数の多様化に影響を与えた可能性がある。

本稿は、職員研修の一環である令和元年度実務向上研修で発表した相良の研究論文をもとに、令和2年度刊行の『細山田遺跡2』で報告した資料を追加し、森が加筆・修正を行った。

本研究に際して、文様割付の分類資料数の目標を100点に設定した。資料の点数こそ目標を達成したものの、文様割付・区画数の時期的変化を追うにはまだまだ資料が少なく、今回はおおまかな傾向を探るだけで終わってしまった。今後さらに多くのデータを収集・蓄積し、時期だけでなく地域ごとの文様割付についての製作方法・計画性の違いなども調べていきたい。

本研究を進めていく上で、立神倫史氏には多くの貴重な御指導・御助言を頂いた。この場を借りて、感謝の意を表したい。

【引用・参考文献】

- 遠部慎・相美伊久雄 2019「志布志市内の縄文時代中期土器付着炭化物の炭素14年代測定—深浦式土器の実年代—」『鹿児島考古』49号
- 栗畑光博 1986「南九州縄文時代前期末土器群の編年予察—大龍遺跡出土土器群の検討—」『AMAME』4号
- 栗畑光博 1993「南部九州における縄文時代前期末から中期前葉の土器について」『鹿児島考古』27号
- 小林謙一 2000「縄紋中期土器の文様割付の研究」『日本考古学』第10号 日本考古学会
- 相美伊久雄 2000「深浦式系土器の再検討」『人類史研究』No.12 人類史研究会
- 相美伊久雄 2006「条痕文土器と縄文施文土器—南九州における縄文時代前期末～中期前葉土器群の再整理—」『大河』8号 大河同人
- 相美伊久雄 2008「深浦式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 相美伊久雄 2011「南九州の鷹島式土器・船元式土器」『南九州縄文通信』21号 南九州縄文研究会
- 鹿児島県教育委員会 1975『花ノ木遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 1993『星塚遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(7)
- 1996『一湊松山遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(19)
- 2003『山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡』鹿児島県立

埋蔵文化財センター発掘調査報告書(58)

2005『桐木耳取遺跡Ⅲ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(91)

2006『堂園平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(104)

2006『市ノ原遺跡5地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)

2007『仁田尾中A・B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(110)

2008『鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(132)

2010『上水流遺跡4』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(150)

2020『中津野遺跡 台地部編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(202)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2016『天神段遺跡2』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(6)

2021『細山田遺跡2』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(35)

志布志町教育委員会 1979『野久尾遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書